

追放された令嬢が
モフモフ王子を拾ったら
求愛されました



ゆきづき花

Hana
Yukizuki

目次

追放された令嬢がモフモフ王子を
拾ったら求愛されました

書き下ろし番外編

幸せの在り方

追放された令嬢がモフモフ王子を
拾ったら求愛されました

プロローグ 聖女候補失格らしいです、やったね！

消灯時間の直前。

私はフワフワした銀色の毛玉をこっそりと自分のベッドに招き入れた。銀色の毛玉——イザックはすんすんと鼻を鳴らし嬉しそうに尻尾を振って、私の脇の下に潜り込んでくる。

「イザックは温かいね〜」

私はイザックのモフモフを堪能しつつ、鼻先に軽くキスをした。お返しのキスみたい
にイザックが口の周りをべろべろと舐めてきて、くすぐりたい。

「もうすぐアルマが来るから、じっとしていてね」

私がそう言うと、イザックは脇の下から足の間に移動した。彼のおかげでベッドが温かくなつて心地よい。イザックの毛は長いから足に当たるとふわふわとくすぐつたくて、つい笑ってしまう。

言つた通りにイザックはじっとしていたけれど、私が笑ってしまったせいで部屋の灯りを消しに来た侍女のアルマには簡単に見つかってしまった。

アルマが掛け布をめくつてため息をつく。

「ジゼルお嬢様、またイザックを部屋に入れたのですか!? 司祭様に叱られますよ!」

「大きな声を出さないでよ、アルマ。ちゃんと体は拭いたし、ほら足も綺麗でしょう? お願ひ、内緒にして! 寒いだもん!」

この部屋には暖炉があるから暖かい。けれど、中型犬のイザックは体温が高めだから、一緒に寝るともつとほかほかになるのだ。

「お願ひ!」

アルマは大好きだ。そして、イザックが私にとても懐いていることも知っている。

イザックも頭を下げるような姿勢で「くーん」と小さく鳴いた。

結局、上目づかいの私たちを見遣つたアルマは、諦めたような表情で「明朝、懺悔してくださいよ。おやすみなさいませ、ジゼルお嬢様」と言つて燭台の灯りを消して部屋から出ていった。

「やったね! イザックもおやすみ」

私はモフモフと寝る権利を勝ち取つた。ベッドの中が温かいと睡魔はすぐにやっ

くる。

早朝からお祈りをして、孤児院の子どもたちと庭を駆け回って、畑仕事もしてクタクタだったから仕方ない。疲れたけれど、今日も楽しい一日だった。

王都にいた頃は、こんな自由なんて味わえなかった。

汚されて捨てられた可哀そうな元聖女候補だの、地味令嬢だの、なんだのかんだの言われていた頃に比べたら、今の暮らしのほうがずっと幸せだった。

「イザックがいるし、ここでの生活は楽しくて仕方ないよ」

月明かりだけが射し込む部屋の中で、私は少しだけ体を起こして毛布の中に手を伸ばし、足の間にいる毛玉を撫でた。そんな私の手をペロっと舐めてくれたイザックは、とても可愛かった。

私がこの女子修道院に来たのは、約二か月前。

聖女候補として失格である、という烙印を押されて王都から追放された。その後、伯爵家の領地にある女子修道院で、慎ましく暮らすことになったのだ。

——伯爵令嬢という身分を捨てて。



サン・ウアル王国には代々『聖女』が存在する。

大地の女神に寵愛された聖女が『祝福』を捧げることで、豊穣をもたらし、国を加護する。伝承に基づいて聖女は魔力が強くかつ処女であることが求められる。そのため聖女候補になると王宮の大聖堂カテドラルに集められ選抜試験を受けるのだ。

基本的に一人で試験を受ける必要があるが、候補者が身分の高い子どもだった場合には、親や侍女がついてくることも許可されていた。

女神の代行者である聖女は、全王国民の崇拜の対象であり、聖女に選ばれるのは最高の栄誉であるとされた。

昔は独身を貫いて、生涯を国のための祈りに捧げた聖女もいたらしい。でも今は聖女とは名ばかりになっていた。魔力よりも政治力のある貴族の娘が聖女になり、数年務めたあとは王侯貴族の子息と結婚して引退するのが慣例化していた。

なお、聖女候補になった者は、たとえ聖女に選ばれなかったとしても、身分を問わず縁談の数が増す。

魔力は後天的に備わるものではない。ゆえに、強い魔力を持つ聖女候補は、貴族社会では理想的な結婚相手として優遇された。持つ魔力の強さが、その家の格式や評判にも

関わってくるからだ。

さらに、強い魔力を持つ女性は、強い魔力を持つ子どもを産むといわれている。だから一部の貴族は魔力が強ければ平民でも妻にして子どもを産ませた。

そんな風潮がある中、私は貴族でありながら魔力が弱いことで有名なトルトゥリエ伯爵家の次女として生まれた。だから『現聖女の力が衰え始めたので、次代の聖女を選出する』と国からお触れが出て、それを聞いた年頃の娘たちが色めき立っていても、何の興味も持たなかった。

どうせ私の魔力も弱いのだから選ばれるはずなどない。

そもそも最高の榮譽とやらにも、結婚にも興味のない私には、何もかもが縁遠い話のはずだった。

だから、もう寝支度をしていたある夜、帰宅した父が応接室サロに来るよう私に命じ、「お前も聖女候補の一人だ」と告げた時、私はかなり間拔けな顔をしていたと思う。

「私が……聖女候補？」

ただ言われたことを繰り返し口にしただけで、全く事態を呑み込めていない私に向かつて、酒が入った状態であろう父は上機嫌に話を続けた。

「そうだ、十二人の候補者のうちの一人だ、嬉しいだろう！ 侍女をやる余裕などうち

にはないから、大聖堂カテドラルには一人で行くように」

余裕がないのは目の前にいるこの父親が散財した拳句、使用人の数を減らしたからなのだ。その言い方には腹が立ったが、なるべく父を刺激しないよう控えめに反論した。

「待つてください、お父様。……私はもう十八歳です。候補者のほとんどは、十二歳から十六歳ですよね？」

父は不摂生な生活をしているせいで、今日も顔色が悪い。凄むように睨にらまれると見慣れているはずでも少し怖い。

私の言葉に父は不機嫌そうな顔をして、吐き捨てるように言った。

「ジゼル、お前が社交下手で引きこもってばかりだから、この歳になっても縁談の一つさえこないのだ。生まれつき魔力だけは多少あるのだから、それを使って少しは家の役に立て」

愛人宅に入りびたりで、ろくに屋敷にいない父が帰ってきたかと思えば「家の役に立て」などと命令されて、うんざりした。

家の財産を食い潰している張本人にそんなこと言われても……と思ったが、口に出す勇氣は私にはなかった。母の助けを請おうにも、この父が帰宅すると母は絶対に自室から出てこないのだ。

見合い結婚とはいえ、私が幼い頃の父と母はとても仲が良かった。だが先代当主である祖父リオネルが亡くなると、爵位を継いだ父は金使いがどんどんと荒くなっけいき、それにつれ両親の言い争いが増えた。

そのうち、父は外に愛人を作って滅多に家に帰ってこなくなり、実質的にこの家を仕切るのは、女主人である母と、伯爵家長男のアルチュールお兄様になった。

だが、そんなろくでもない父であったとしても家長なので、命じられたのであれば、娘の私は従うしかない。

私は地味で内向的で別段美人でもない。貴族社会で名を馳せることなどできるはずもなく、せいぜい政略結婚の駒として父に使われるだけの存在だろうと覚悟していた。

兄はすでに結婚しているし、男遊びばかりしていた一歳年上の伯爵家長女、エステルもやつと婚約した。しかも国王の第二妃の生家である、ラ・ヴァリエール伯爵家の若き当主を捕まえた、と父も姉もはしゃいでいた。

父は厄介者である私を、せめて聖女候補にして箔をつけてから嫁がせたいのだろう。

「わかりました……精一杯努めて参ります」

ふんぞり返る父を一瞥して、私はしぶしぶ返事をした。

すると父は、一転して満足そうに頷いた。父の思惑通りに事が運ばばいいが、そうな

らなかつた場合、また容赦なく叱責されるだろうな。それに何より気が重いのは、人の多い場所へ行かなければならないことだった。



カテドラル
大聖堂に集められた聖女候補者たちは隣接する寄宿舎で共同生活を始めるのだが、初日から私の存在はかなり悪目立ちしていた。

私以外は皆、少女と言つていい年齢。

一番背が高いデルサール侯爵令嬢ミシエルに期待したが、彼女が十六歳と紹介された瞬間、私は早くもここに来たことを後悔していた。

カテドラル
王宮の敷地内にある大聖堂は、二つの尖塔を持ち、建設に百年かかったといわれるほど壮麗な建物だ。

青と赤を中心に彩色されたステンドグラスは、内側から見ると光が複雑に溶け合い、とても美しい。正面の装飾には神話に登場する神々の彫刻があり、入口の女神像は特に優美な御姿で有名だった。

カテドラル
大聖堂は祈りの場であると同時に、聖堂学校として聖職者たちが学ぶ場でもある。正

式な聖女は聖職者であるため、候補者たちも全員が聖堂学校で神学や天文学を学ぶことになっている。

私たちも例にもれず、集められたその日から早速授業が始まった。

私は王都の学校には通わず、家庭教師から勉強を教わっていた。だから、大人数で講義室にいること自体が落ち着かない。

はじめは少しそわそわしていたが、数日も経てばその状況にも慣れてくる。他の候補者たちのように、別に積極的に周囲に話しかける必要はないのだ。聖典を思う存分学ぶことができる今は、むしろ贅沢で楽しい時間なのでは、とさえ思い始めていた。

相変わらず友達はできなかったが、聖堂学校も悪くないなと思いついたある日のこと。私は授業を受けるために、寄宿舎から聖堂内の講義室へと一人で移動していた。

その日は快晴だったので、きつと聖堂の床にはステンドグラスが綺麗に光を落としているだろうなあと思いながらのんびり歩いていると、皆が噂話をしているのが耳に入った。

「今日はヴィクトール王太子殿下が大聖堂カテドラルに来られるそうよ」

「もしかして、お声がけいただけのチャンスなんじゃない？」

「でも、殿下にはすでに婚約者がいるんじゃない？」

「相手が王太子殿下なら、私は第二妃でも全然構わないわ。聖女より、そっちがいいかも」

「ちよっと、大司教様に聞かれたら候補者から外されるわよ」

聖女候補が王族と結婚するのはよくあること。彼女らがここに来たのは『聖女になるため』ではなく『結婚相手探し』なのだろう。

かく言う私も父親のゴリ押しで候補になっただけで、聖女になるつもりなど全然なかった。とはいえ彼女たちとは異なり、結婚する気もさらさらない。とにもかくにも、早くこの選定が終わり、元聖女候補という肩書がもらえればそれでいい。

盛り上がる彼女たちを横目に講義室に着くと、何となく昨日よりもざわざわしている気がする。

（王太子殿下の視察があるかもしれないから、皆浮かれているのかな？）

私は他人事のように考えながら、ざわつく教室をぐるりと見渡し、席に向かった。

聖堂自体は古くからあるけれど、講義室は改装してあるので新しく綺麗。椅子は楕形の無垢材むくぎざいで作られていて、背板には花びらの彫刻が施されていて可愛く、とても気に入っていた。

しかし私が座ろうとしたその可愛い椅子に、なぜか分厚い聖典がどっさりと積んであ

る。しかも、ご丁寧なことに、机の上にも聖典が置かれていた。

聖典は全部で三十三巻。見上げるほど積まれたこの量だと全巻どころか外典までありそうだと。

（これだけ運んできて載せるのは大変だっただろうな。しかし、これじゃあ座れない）

一体、誰がわざわざこんななめんどくさいことをやったのか。手分けしてやったのかな、それとも何往復もしたのかしら？

そんなどうでもいいことを考えていると、背後から声をかけられた。

「トルトゥリエ伯爵令嬢ジゼル様、お座りにならないのですか？ ……ああ、違いましたわ、座れないのですね！」

振り返ると、綺麗に整えられた金髪を豪華に結い上げて、煌びやかな宝石の髪飾りまでつけた美少女が、笑いながら私を見下ろしていた。

舞踏会でもないのに、コルセットも身につけているのであろう腰のくびれ。それによつて、より強調された大きな胸元に私の目は釘付けになった。

この美少女——デルサル侯爵令嬢ミシエルは、私よりも年下のはずなのに、何を食べたらあんなに胸が大きくなるのだろうか。伯爵家とは名ばかりの貧乏な我が家とは異

なり、毎日いいものを食べてきたに違いない。うらやましい。

周囲の光が反射しているのか、彼女の姿が眩しく感じられて目を細めていると、彼女はまた笑った。

「もう授業が始まりましたよ？ 本日はヴィクトール王太子も視察に来られる特別な日なのですから、真面目に受けないと……ねえ、皆様？」

今度は明らかに嘲笑あざわらっている。周りの少女たちもクスクスと笑っているから、これは全員示し合わせてのことなのだろう。

これは私の憶測なのだが、おそらく他の候補者たちは、なるべく座学で私を蹴落としておきたいのだと思う。まして今日は王族が視察に来るらしいので、ライバルは一人でも少ないほうがいい。

なぜ彼女たちが私を座学で蹴落としたいのかと言うと、聖女候補の中で私の魔力が一番強いからだ。

我が家は代々魔力の弱い家系でほとんどの者が文官になる道を選んでいる。

私も一般的な教科しか学習してこなかったもので、自分が強い魔力を持つことに気づいていなかった。

聖堂学校に来て、古代ローデヴァニア語で詠唱する『祝福』の作法を教わって、そこ

で初めて人よりもはるかに魔力が強いことを知った。

あの瞬間の皆の驚いた表情は忘れない。そして、あの場にいた者のうちの誰よりも、私が一番びつくりしていた。

「どうして……貧乏伯爵家のあなたが……？」

そう言って悔しそうに顔をゆがめていたのはデルサル侯爵令嬢だった。

少なくとも弱くはない魔力を持っていたから、こうして聖女候補になったわけだが、まさか自分が実技で一番になるなんて予想外だった。ただ、たしかに実技では群を抜いているかもしれないけれど、政治力のない伯爵家の人間である私が、聖女に選ばれることはないだろう。

だから、こんな悪意に晒されてまで講義に出席しなくていいや、と私はそつとため息をついた。

ニヤニヤと笑う彼女たちの、子どもじみたくだらない意地悪に対して返答するの面倒になり、私は黙ったままミシエルの横をすり抜けて聖堂の外へ出た。

理由も告げずに欠席したら、聖女候補の査定に響く。それは十分承知していた。

しかし、できることなら、このまま家に帰りたいくらいにはこの状況に辟易していた。だが、家族が驚くだろうし、がっかりもするだろうから、それだけは我慢することに

した。

——この日をきっかけに、私は授業に出ずサボりがちになり、最終的に隙あらば昼寝している怠け者として、十二人の聖女候補者の中でも、自他ともに認める最下位に転落した。

ライバルが減って満足したのか、それ以降、彼女からの嫌がらせはなくなった。

そんな風に劣等生らしく安穩あんのんと昼寝と読書を楽しんでいると、突然、私は大司教から呼び出された。

大司教はこの王都を含めた周辺を教区として受け持ち、この国の聖女を選出する責任者でもある。

カテドラル大聖堂の司教座に座る大司教は、普段身につけている黒の平服スエクトルではなく、正式な場を着用する緑の法衣だったので、それを見た私は緊張した。座学も実技も不真面目だったから、いよいよ怒られるのかな。ただ、何か通達があるにしても大司教の従者の一人も控えていないのは何か変だなと思っていたら、大司教は私の予想以上の言葉を告げた。

「トルトゥリエ伯爵令嬢、そなたは聖女候補から外れてもらう」

訓告や注意などなく、いきなり落第させるのかと少しだけ不満はあったけれど、別に聖女にならなかったわけではないから、聖女候補に未練はない。

「……承知しました」

突然すぎて状況がよくわからなかったけれど、私は素直に承諾した。

何の抵抗も質問もせず、そう返事をしたから、大司教が驚いていたくらいだった。

落第を通告されてすぐに荷物をもとめながら、どうやって屋敷に帰ろうかと考えていると、大司教は王家が管理する馬車に乗るよう私に命じた。

しかも馬車の行先は王都にある伯爵家所有の屋敷ではなく、馬車で一日かかるトルトゥリエ伯爵領にある領主館。

そして、領主館で待っていた母から事の顛末てんまつを聞いた。

どうやら私は王太子殿下のお手付きで、処女ではないから候補から外されたらしい。

そして、王都から出て、二度と登城してはならぬとお達しがあつたそう。つまり、王都からの追放である。

わざわざ王家の馬車に乗せてくれるなんて親切だなあと思っていたけれど、これは連行だったのか！

あまりにびっくりしすぎた私は感情をうまく整理できず、もはや抑揚がなさすぎて棒読みになってしまった。

「へー、私は王太子殿下には会ったこともありません。身に覚えはないのですけど」

王太子殿下が視察に来られると聞いた日の授業にさえ出ていないから、顔すら知らないのに。

成績が悪すぎて聖女候補失格と言われるのならまだわかるが、処女ではないから失格と言われるとは……。残念ながら処女です。

「身に覚えがない、そうでしょうね」

「え？　そうでしょうねってお母様、どういうことですか？」

「私も寝耳に水なのよ。まさかジゼルジゼルの純潔が疑われるなんて思ってたわ」

「そもそも相手がいませんものね」

私は呑気に笑ったが、その様子を見た母は、尖った声で説明を始めた。

「デルサル侯爵が自分の娘を聖女にしたいがために噂を捏造したようなの。その噂を鵜呑みにした国王陛下はあなたを候補から外すよう命じた、ということ」

母はギリギリと歯ぎしりしている。噛み合わせが悪くなるだろうから、やめたほうがいいのに。なまじ美人だから噛みしめている顔がとても怖い。

「……はあ、結構な不名誉ですねえ」

「はあ、じゃないわよ。これはとんでもないことなの！　殿下には婚約者がいるのよ？　婚約者のいる男性とホイホイ寝るような女だと言われたの、わかってる？」

そういうえば、御年十八歳のヴィクトール王太子殿下は、十六歳のミュレー公爵令嬢との結婚が正式に決まっている。

私は社交が苦手で、公的な集まりでない限り舞踏会にも夜会にも出席しなかった。だから、二人のこともあまりよく知らないし、特に興味もなかった。

数少ない公式行事の舞踏会は、参加者がたくさんいるから、王家の方々には一瞬しかご挨拶できないし、その時に対面しているのであろう王太子殿下の顔も記憶にない。

しかもご挨拶したのは社交界デビューした年のみだから、もう四年は会っていないいや、会っているかもしれないけれど、全然覚えていない。

それに、舞踏会には姉妹で参加することがほとんどなのだが、外向的で華やかな姉のほうが男性陣の注目をいつも集めているから、私の存在はかなり薄い。王太子殿下も陰にいた私のことを覚えていないだろう。

そもそも殿下に限らず、トルトゥリエ伯爵家には娘が二人いるって覚えている人は、王都でも少ないんじゃないかなと思う。お茶会も、社交界デビューした年に数回招かれた程度で、人と話すのが苦手な私はほとんど喋らず、友達もできないままに帰宅したものだ。それくらい、私は社交から遠ざかっていた。

私はそんなことを思い出しながら、母がデルサル侯爵や国王陛下に向けてずっと文

句を言っているのをぼけーっと聞いていた。そんな私を見て、母が呆れた表情で大きなため息をつく。

「深刻なのよ、本当にわかってるの？」

「ええ……事実じゃないにしても、こんな噂が立ってしまった以上、嫁ぎ先がなくなっただってことですよね？ 元々結婚願望もなかったですし、これを機に修道院で働かせてもらえたら嬉しいです。たぶん私は王都の生活が向いていないんです」

私が肩をすくめると、「そうかもしれないわね」と母が諦めたように呟いた。

たとえ頑張つて否定したとしても、不名誉な噂は簡単には消えない。これ以上、肩身の狭い思いをしてまであの世界で生きていたいとは思わない。

幼い頃は、それなりに『花嫁さん』に憧れていたはずなのに、いつから私は結婚願望そのものを失ったんだろうか。

「お父様には『お役に立てなくてごめんなさい』とお伝えください」

私がそう言うと、さっきまで激昂していた母が「結婚もできないなんて……」としくしく泣き出した。そんな母を私は一生懸命に慰めた。

役立たずの娘が悲しませてごめんね、お母様。

第一章 修道院でのびのびアグリライフ

修道院に入り志願期を終え、司教に認められることで、ようやく正式な修道女になることができる。

約一年間の志願期には休暇がなく帰宅が認められないので、「しばらく会えないから」と、母は王都へは戻らず、私の修道院入りのための身支度を手伝ってくれた。

でも、持っていくものは特にない。好きだった本を自由に読めなくなるのは悲しいが、修道院には図書室があるから、神学関係の本を色々と読めるのはむしろ楽しみだ。

母は王都に住む兄たちや親戚への連絡に追われて忙しそうにしている。何かしていると気がまぎれるのか、あれ以来、母が私の処遇に対して文句を言うことはなくなった。

ただ、屋敷の使用人たちが「王太子殿下と通じているなんて……うちのお嬢様に限って、そんなことあり得ないのにね」などと噂しているのが耳に入ってくるようになった。同情してくれているのだろうか……いや、たぶんけなされている。

ちなみに母と兄の配慮で、私と同じ歳の侍女、アルマが女子修道院までついてきてく

れることになった。アルマは伯爵家に仕える使用人で、彼女の両親と一緒に幼い頃からずっと下女として働いていた。

厳格だった祖父が亡くなったあと、箠むちが外れたかのように遊び始めた父のせいで借金が増え、使用人の半数に暇を出さなければならなくなった時も、「給金が下がってもいから」と、家族全員で伯爵家に残ってくれた。

アルマは下女から侍女になり、以来ずっと私のそばにいる。

志願期が終わればアルマは私のもとを去り王都へ戻る予定だけど、それまで彼女が一緒なのはとてもありがたかった。

身の回りの整理に追われているうちに、あつという間に時間が過ぎていた。修道院入りの支度がすっかり整った頃、思いがけないことに姉が領主館へやってきた。

「あなたの『噂』のせいで、公爵令嬢は相当怒っているらしいわよ！」
惜別せきべつの感情など一切持たず、確実に面白がっている。

「サラ嬢は殿下に直接文句を言いに行つて、何やらひと悶着あつたらしいわ！」

ヴィクトール王太子殿下の婚約者であるミュレー公爵令嬢サラ様は、国王陛下の異母妹の娘、つまり王太子殿下の従妹であり、自身も王位継承権を持っている。

聞いたところによれば気の強いお嬢様らしいので、きっと修羅場だっただろうなあと

思う。お二人が喧嘩になったとしたら、身に覚えはないとはいえ自分のせいなのだから、申し訳なさを感じてしまう。

「もう、お茶会や夜会のお誘いが増えて忙しいの！」

そもそも噂で私の名前が出て、紳士淑女の皆様は「誰それ？」状態だったのだとか。やがて火種がトルトゥリ伯爵家の次女だとわかると、詳しい話を聞くために姉であるエステルがあつちこつちに呼ばれているらしい。わざわざ姉が領地までやってきたのは、私を馬鹿にするためなのかと、お茶菓子を出してまで話を聞いたのを後悔した。

母はちょうど所用で出掛けていて、今この屋敷で姉を相手するのは私しかない。

いちいち反応するのも面倒だから、姉のために出したお茶菓子を食べながら黙っていると、私が聞いてもいないのに、姉は王都に広がった『噂話』をべらべらと喋り続けていた。

私が社交界にほとんど出なかったのは、孕ませた私を人目に触れないように王太子殿下が命じたからだとか、とんでもない不細工だから隠れて暮らしていたのだ、とか……市井では尾鱈おひれがついて、さらにひどい噂になっているらしい。

夜会で忙しいならさっさと帰ってくれないかな……

そう思っとうつむいたまま黙っていたら、ようやく喋り疲れたのか、姉は「聞いて

る？」と私を咎めると、冷めてしまったお茶を一気に飲み干した。

カチャンと音を立てて無作法にカップを置くと、姉は真面目な表情で私に質問してきた。

「ねえ、まさか事実じゃないわよね？ あんたが殿下に見初められるとか、冗談でしょ？」

「事実ではありませんし、身に覚えがありません」

「そうよね、そうだと思った！」
私は少しホッとした。

うるさい姉だが、社交界での顔は広いから、これで噂も少しは沈静化するだろう。

姉が王都に戻って、静かになった屋敷で残りの準備を進めた。

そして、ついに修道院に入る日を迎えた。

前日には、多忙な兄たちもお別れを言いにわざわざ領主館まで来てくれたのに、父は顔すら見に来なかった。貴族として役に立たなくなった私は、父にとって時間を割く価値がないのだろう。

たとえ誤解が解けたとしても、もう王都に帰るつもりはない。建前だけの貴族社会とは縁遠い世界で暮らしたい。つくづくうんざりした。

修道院のある領都スリズヴィルは、王都から馬車で一日かかる距離にある小さな街だ。私がお世話になる女子修道院はスリズヴィルの郊外にあり、併設の孤児院の他に、周りには森と畑だけ。

姉は「遠くて面倒だ」と一度も来たことはないが、私は幼少の頃から何度か訪問していたので、女子修道院で暮らすほとんどの人と顔見知りだった。

でも、清貧と貞潔、そして従順であることを誓い、「ここで暮らします」と紹介された当日は、全員から遠巻きに見られ、腫れ物扱いだった。

『領主の娘』である私がなぜここに来たのか、皆知っているのだろう。

敬虔で信心深いからではなく、不名誉な理由によってここにいるということ。

副院長から各施設や仕事内容の説明を聞き終え、部屋に荷物を置いたあと、私は実家から着てきた小綺麗なドレスを脱ぎ、白い襟のついた灰色のワンピースに着替えた。邪魔にならないように、長い髪は一つに束ねて、規定通り黒いベールをかぶった。

この修道院では、志願期を終えてから修道服が与えられるので、志願期が始まったばかりの私は、質素であれば服装は自由。それに、この女子修道院には正式な修道女ではない、お手伝いのような人がいて、多くは黒か灰色の服を着ているから、私もそれにならった。

この日は規則を覚えたり、説明や案内だけで一日が終わってしまったが、明日からはもう見習いとしての仕事が始まる。

ちなみに、院長は寡黙な御年八十九歳のおばあちゃん、私がご挨拶に伺った時も、眠っていたのか聞こえなかったのか、こっくりと小さく頷いただけだった。寡黙という言葉が、たぶんあんまり耳も聞こえていないと思う。

慣れない環境に疲れたのか、私は与えられた部屋で寝具を整えると、いつの間にか眠っていた。アルマが部屋の灯りを消しに来たのにも気づかないくらいだった。だからあとでアルマから「いくら女子修道院とはいえ、寝る時は部屋の鍵をかけてください」と叱られた。

翌朝、私が一人で身支度をしていると、出番がなくて手持ち無沙汰なアルマが話しかけてきた。

「ジゼルお嬢様、もしかしてこの状況を楽しんでらっしゃいますか？」

「……そうかもしれない。窮屈なコルセットも、踵の高い靴も脱ぐことができて、嬉し

いのかも……」

それを聞いたアルマは、安心したように笑いながらベールを綺麗に整えてくれる。彼女のほうが私よりも少し背が低いから、アルマが私を見上げるようにして言った。

「お嬢様をご奉仕なさる時間帯は、私も奉仕活動をさせていただく予定です。ですが、もしお困りのことがあったら、いつでも私を呼んでくださいね！ 私の一番はお嬢様ですから！」

「アルマ……本当にありがとう！ 私、頑張るね！」

私は新しい生活を前に気分が高揚していた。

けれど、このわくわくした気持ちは、すぐに打ち砕かれることになる。

この修道院では、いくつかの仕事を体験してから、主に従事する奉仕活動を決めることになっている。私は朝のお祈りと食事のあと、副院長に指示されて厨房に赴いた。午前中は孤児院の子どもたちへのおやつと、全員の昼食を作るらしい。

修道院では旅人をもてなすこともあるから、厨房は広く、設備も充実している。

私が厨房の扉を開けると、数人の修道女が雑談しながらすでに作業を始めていて、厨房の外までバターのいい匂いが漂^{なま}っていた。

「例のあの、今日はここに来るのよね？」

「一通り、色んな仕事をする決まりだからねえ」

「だいたい、何て呼べばいいのか……あ！ ジゼルさ——お嬢様！」

入口に近い場所で作業をしていた若い修道女が私の存在に気づいたらしく、驚きの表情で名を呼んだせいで、全員の視線が一斉に私へ向けられた。

……ちよつと怖い。

少し怯^{ひる}んでしまったが、ずっと立ち尽くしているわけにもいかず、入口の扉から厨房内へと入り、おずおずとお辞儀をした。

「ジゼルと呼んでください、よろしくお願いします」

彼女たちは戸惑ったような表情で私を一瞥^{いちべつ}して、黙ったまま作業に戻ってしまった。

厨房にいる修道女は六人だったが、名前も教えてくれないし、視線も合わせてくれない。私に対して、どう接していいのかわからないのは当たり前か……と思うと、気まずい空気にしてしまったことが申し訳ない。

「はじめは見学しててくださいね」

微妙な空気を察知したのか、厨房の責任者らしい年配の修道女に声をかけられて、しばらくの間、私は皆が作業するのを黙って見ていた。

たしか、厨房の責任者である彼女の名前はシスター・クローディだったはずだけれど、正直に言って服装では見分けがつかないし、その名前が合っているのかもわからず、急に不安になってしまった。

私に名前を呼ばれるのが嫌だったらどうしよう……。そう思うと、声をかける勇気が出てこない。

ただ、ここには何度もお手伝いに来ていたから、少し見学すれば大方の作業内容は理解できた。

疎外感にいたたまれなくなつて、せめて立っているだけではなく皿洗いくらいはしようか、と私は流しに積まれている調理器具に手を伸ばした。

「やめてください！」

近くにいた修道女にそう語気強く言われてしまい、私はびっくりして思わず手をひっこめた。

「勝手にごめんなさい……」

「……あ、いえ、お嬢様はしなくていいですよ。私がやりますから」

彼女は私の前に割り込み、流しの前に立つ。やることなくつてしまった私は、そのまま厨房の壁際まで後退あひずりった。

結局、私が食材にも食器にも一切触らせてもらえない間に、トマト味の豆スープとおやつやつのクッキーができあがった。厨房の空気は私のせいでも気まずかったが、昼食とおやつはとても美味しそうだ。

何もできなかつたけれど、それはもう仕方がない。

たしか午後は農作業をやるらしいから、ご飯をしっかりと食べて、今度は役に立てるよう作業の準備をしよう！

そう考えて、皆が厨房から出ていくのを待ってから、私は一人で食堂へ向かった。

修道院では折り以外にも食事が大切にされており、食堂は聖堂の向かいに位置している。

高齢のために歩くのが困難な院長以外の全員が揃い、大地の女神に感謝してから昼食の時間が始まる。食堂は広く、大勢の人がいる中で食事するのはちょっと緊張してしまふ。

なるべく目立たないよう隅っこに座ったせいか、何となく皆とは距離がある。

聖職者とそうでない者は食事をする場所が別なので、この食堂にアルマはいない。食事中の私語は厳禁だが、仮に私語が許されていたとしても、きつと誰にも話しかけることも話しかけられることもなく終わるだろうから、今の私には逆^{さか}にありがたかった。

修道院の食事はパンとおかずが一品、それから野菜と果物。

我が家は貧乏だったので、これを特別少ないとも思わず、むしろ果物があつて嬉しいな、と内心喜んでいた。

修道院の畑で採れたものだけでは賄えないので、行人人からも食料を買っているそう。スープには白い菜豆^{さいとう}だけでなく、レンズ豆やひよこ豆といった数種類の豆が入っていて、とても美味しかった。

おかわりが欲しかったのだが、一人当たりの食べる量が決められているので、それは叶わなかった。

スープだけでなく、新鮮な野菜や果物は美味しかった。でも、パンは甘みが少ないように感じた。

好みの問題かもしれないけれど、王都で流通しているものより味が薄くばさばさとしている。もしかしたら、この小麦の質があまり良くないのかもしれない。

ただ、それを誰かと語り合うこともできず、私はただ黙々と食事を進めた。

食後のわずかな休憩時間に、私は自室でぼんやりと考え事をしていた。

修道院の皆が私を受け入れるには時間がかかる……。昨日の皆の態度を見ていたから、

わかっていたつもりだったけれど、改めて覚悟しなければ。

短時間の『お手伝い』ではなくこれからずっと『生活』するのだから、急に現れた領主の娘に皆が戸惑うのも当たり前。だから、ゆっくりでいいから皆に認めてもらえるよう、一生懸命仕事をしようと思う。

昼からの農作業も頑張るぞー！

そう意思を固めて一人部屋で拳を突き上げていたら、アルマが様子を見に来てくれた。午前中の彼女は、庭の菜草園で雑草取りなどの作業をしていたらしい。

「私は修道院に来るのが初めてなので、色々と教えてもらいました。皆様はとても親切ですね。厨房はいかがでしたか？何かお困りのことはありませんでしたか？」

「うーん……うん、大丈夫！ありがとうございます」

「なら良かったです。お嬢様は、午後の活動は外ですね。私は財務係へ行って勉強してきますね」

うん、困ったことはない。困るほど何かできたわけではない。むしろ何もできなかった。

唯一これまで通り話しかけてくれるアルマの顔を見て、少し気持ちが和らいで、私はまた元気を取り戻していた。

午後の鐘が鳴ったので、敷地の外にある畑へと向かう。

農作業の責任者はシスター・イネス。私が修道院でお手伝いをしていた時は、彼女とよく話をしていた。背が低くしつかりとした体幹でパワフルに作業していたのを覚えてる。

記憶の中の彼女は真面目なのに気さくで、日焼けした笑顔が印象に残っていたのだが、今日は他人行儀で、ちょっと居心地が悪いようだった。

「ジゼル様……ジゼルさんが聖女候補だったということは、『魔力が強い』と判断してよろしいですね？」

「はい。ですが、魔力のコントロールはあまり得意ではありません。これまでほとんど使ったことがなかったの……」

「使わなかった？ 魔力があつたのに？」

「聖女候補になるまで、他の人よりも強い魔力を持っているということを、私も知らなかったのです」

私がそう答えると、イネスは不安そうな表情になった。

しまった、また役立たずだと思われて、ここでも仕事してもらえないかもしれない！

私にもできることがあるとアピールしなければ。

「あのっ！ でも、初歩の『大地への祝福』ならできます！ 是非やらせてください！」

聖女候補者として大聖堂カテドラルに集められて、最初に教えられた『大地への祝福』。

聖女の仕事として、一番大切なことだからと何度も言われたから、怠け者の私でも覚えていたのだ。

聖職者の『祝福』とはいわゆる強化だ。

聖句と呼ばれる古代語の言葉を詠唱して周囲にいる精霊と会話する。聖職者は精霊たちに呼びかけて力を貸してもらい、場に澱よどんで溜まった澱よどを浄化する。精霊たちは清浄な空気を好むので、聖職者の『祝福』には喜んで力を貸してくれるし、魔力が強ければ強いほど、澱よどをより綺麗に浄化することができる。

澱よどみをなくして精霊が持つ本来の力を取り戻してあげることによって、たとえば『大地への祝福』なら植物の成長を促進することができる。

なお、聖句を集めた聖詠と呼ばれる祈祷書は、全て教会が管理していて、聖句の継承は聖職者に限られる。もちろん聖職者でない人が、聖句を耳で聞いて覚えることで『祝福』すること自体はできるけれど、誰でもがその聖句の効果を同じように発揮できるわけではない。一定以上の強さの魔力を持たないと、聖句を詠んだところで精霊たちには届かず、存在に干渉できないからだ。

教会や修道院で行う朝夕のお祈りは、その聖句が民間に伝わって長い時間をかけて変化していったものだといわれていて、子どもにもわかる現代の言葉で捧げられる。だから、たくさんの人々が祈りを捧げる聖堂などには、古代語でなくても、その祈りを心地いと感じる精霊たちが好んで漂たゆっているらしい。

一応『元聖女候補』である私の申し出にもかわらず、イネスはあまり期待していなかったようだ。自分も広い大地へ向かって祝福して、成功するかどうか、自信があるわけではない。でもやってみるしかない。

それに、できれば小麦の質を良くして、もう少し美味しいふっくらもちもちのパンが食べたい。

私は小麦畑の中心で手を組んで目を閉じ、近くにいる精霊に話しかけた。

精霊たちの姿を見ることはできないが、存在は感じられる。

まず場を浄化して精霊の持つ大地の力を増幅させて、土に根ざす農作物が空に向かって成長していくように祝福を与える。詠唱を少し間違えたが、ひたすらにお願いをして目を開いた。

「この小麦たちが健康になるように祝福したので、収穫するまでは病気にかかりにくくならないと思います。収穫量が増えたら、作るパンの種類も増やせるかもしれないですね！」

「……はあ、そうなのですか……？」

私が説明しても、イネスは怪訝けげんそうな顔をしていた。

まあ、すぐに信じてもらえないのは仕方ない。麦が目に見えて急激に大きくなるわけでもないし、病気にかかりにくくなったのかどうかは、しばらく経たないとわからないし。

ちなみに、教会が認めた正式な聖女は、教会と国が管理している『聖女の首飾り』を使い魔力を増幅させ、国土全体に『大地への祝福』を届けることができる。

先ほどの祈りで少し体力を消耗したけれど、まだ作業ができそうだったので、私は深呼吸してからイネスへ声をかけた。

「では、土寄せと雑草取りを始めますね！」

立った麦の茎が倒れないように根に土を盛り、その時に雑草を見つけたら、根こそぎ引っこ抜く。

単調な作業だけど、作物を育てるには大事な作業だ。

私が腕まくりして作業を始めたなら、イネスと私たちをずっと遠巻きに見ていた他の修道女たちも作業を開始した。この麦畑は広いから、土寄せと雑草取りだけでもかなりの時間を要する。

ときどきミミズが地中から出てきたり、種が飛んできたのか可愛い花が咲いていたりする。小さな白い花を摘んで、腰を伸ばして少しだけ休憩していると、近くで作業していた若い修道女が私に声をかけた。

「ねえ、暑いからベール取ってもいいかな？」

「いいと思う……少しくらいは」

私が笑ってそう答えると、彼女はにっこりと笑った。

「いいよね、こっそり取っちゃおう！ 私はエマ、よろしくね」

「私はジゼル。よろしくね」

「ジゼルのさっきの『祝福』、かつこよかったよ！ 司祭様と院長先生以外で、あんなに綺麗に光りながら祝福ができる人、初めて見た！」

光ると言われて、私はびっくりして聞き返した。

「綺麗に光る？ 祝福してる時って、そんな風に見えるの？」

「目を閉じているから、自分ではわからないのかな？ さっきはとっても綺麗に光ってたよ」

私は首を傾げ、少し前の記憶を辿った。

カテドラル 大聖堂で他の聖女候補者たちも『祝福』を捧げていたけれど、そんな風に見えたこと

はなかったはずだ。

そういうえば『大地への祝福』の試験の時、大司教から「信じられないが、この場の誰よりも魔力が強い」と言われたことを思い出した。もしも魔力の強さが『光』として見えていたのなら、他の候補者の目にも明らかだったはずだ。

見下していたはずの私が、実は邪魔な存在だと判明したことで、噂を捏造された挙句、早々に競争から蹴落とされてしまったのだろう。

……やっぱり王都には帰りたくない。そう思って黙っていると、エマは近くの山へ視線を向けて話を続けた。

「お願いがあつてさ……この修道院の山側にある葡萄畑でも『大地への祝福』を捧げてもらえないかな？ 少し前に落花して、そろそろ果実が大きくなる頃なんだけど、今年は虫が多いから被害が増えないようにしてほしいんだ！」

「うん、たぶん大丈夫だと思う！」

雑草取りを続けながら詳しい話を聞くと、どうやら今年は枝の中に寄生する蛾の幼虫や、果汁を吸ってしまうタニが多く困っているらしい。

農作業が一段落したあと、イネスに相談して葡萄畑で『大地への祝福』を捧げつつ害虫を駆除していたら、その日の午後はあつという間に時間が過ぎてしまった。

それから数日かけて色々な場所で作業をしたけれど、どうやら農作業が一番性に合っているようだ。

——土いじり、楽しい！

それに、修道院は自給自足だから、私の『大地への祝福』が重宝ちゆうぼうされて、さらに畑仕事に意欲が湧いていた。

王都の屋敷にいた頃は屋敷内に引きこもりがちだったし、聖女候補だった時も座学が多く、体力も筋力もついていなかった。

だから農作業を始めた頃は、腰が痛くなったり筋肉痛になったりした。でも二週間もすると作業自体に慣れたのか腰痛や筋肉痛にはならなくなった。

さらに修道院の食事が質素だからか、ぼっちゃりだったお腹や腕もすっきりして、何だか体が軽くなったような気さえする。

最初は馴染めるかわからなかったけれど、この修道院生活も無理なく続けられそう。そして最終的に、私の奉仕活動は二つに決まった。

農作業と、それから修道院に隣接する孤児院の子どもたちに勉強を教えること。

修道院で飼っている家畜の世話や、敷地内の畑の世話は、修道女だけでなく孤児院の子どもたちも行っている。その作業の休憩時間や、作業が終わったあとの少しの間、勉

強を教えてあげるのだ。

親を亡くした子ども、親に捨てられた子ども、様々な事情はあるけれど、どんな事情であれ、学校に通っていた子どもは珍しい。

そんな子どもたちに、孤児院を出たあとにちゃんとした生活ができるよう、文字や計算、ちょっとした専門知識を教えてあげるのが、私の役目。

もちろん、今までも基本的な読み書きを教える人はいた。しかしあくまで簡単なものに留まってしまう、その先を教えてあげられる人はいなかった。

より詳しい知識を学習できれば、孤児院を出て仕事を探す時にきっと有利になるし、今のうちに聖典を理解できるようになれば、教会に勤め、正式に神学を学び、叙聖じよせいされて聖職者になる道を選ぶことができる。

そのためにも、もう一歩踏み込んだ勉強を教えてあげたい、という私の熱意は副院長に認められて、ほんの少しだけ予算をもらうことができた。これで子ども向けの本や、筆記用具を購入できる！

ある晴れた週末、街の教会からバズレール司祭が視察にやってきた。

私の暮らす修道院には、院長はいるが修道司祭はいない。だからときどき、バズレール司祭が様子を見に来てくださることになっている。

司祭は幼い頃から知っている人だし、とても穏やかで優しい方だから、話すのは苦じゃない。むしろ、実の父親よりも私は司祭に親しみを感じていた。

私が存分に『大地への祝福』を捧げたおかげか、すすくと育っている麦畑を見渡して、司祭は目を見開いた。

「お嬢様の魔力がこんなに強いとは……。単なる噂でお嬢様を聖女候補から外した国王陛下や大司教が知ったら悔やむでしょうね」

「いえ、自分でもここまで強いとは思っていなかったもので、びつくりしました」

大聖堂で練習していた時はほとんどコントロールがうまくいかず、成長を通り越して枯れてしまったりしたが、実際に広い大地を前にして『大地への祝福』を捧げると、自分でも驚くほどにうまくできた。

聖句は普段は使わない言語なので、詠唱の際に間違えることがあったが、今ではすっかり慣れて最初の頃よりさらにうまくできていると思う。

もっと美味しいパンが食べたいという不純な動機とはいえ、上辺ではなく心から『祝福』を捧げていたから、いつの間にか魔力のコントロールも上手になってきたのかもしれない。

司祭を連れて次に向かったのは、山の斜面にある葡萄畑。

こちら私の『大地への祝福』の力で、虫害にやられることなく順調に育ち、大きな瑞々しい実をつけた。

私は収穫作業をしている修道女たちの中に見慣れた親友の姿を見つけて、「エマ！」と声をかけた。振り返った彼女は、こちらを見てにっこりと笑った。

「ジゼル！ それに司祭様まで！」

「こんにちは、エマ。葡萄の様子はどうですか？」

「害虫もついてないし、今年は美味しくて豊作です！ ジゼルの『大地への祝福』はとってもすごいですよ！」

エマは一つに束ねた綺麗な黒髪を揺らしながら、興奮気味に声を張り上げた。

どうやら例年よりも葡萄がたくさん採れそうで、その分ワインも多く作れそうなのだ

とか。実も美味しいのであれば、ワインの味も美味しくなるだろう。修道院では利益を追求しないから、手間をかけて丁寧にする。今年のワインがどれほど美味しいものになるのか、想像するとワクワクした。

「この分だとワインの製造量も多くなり、さらには出来も良さそうなので、市場に流通させるのはいかがでしょうか？」

元々、女子修道院のワインはとても美味しいと評判ではあったが、市場で売るほどはなかった。でも今年は状況が違う。つまるところ、神に捧げる分と旅人に振る舞う分を残して、あとは売り払ってしまおうという算段だ。

「もし、本当に出来がいいのなら、『教会への寄付金』を上乗せした価格に設定してはどうかと」

「ええ、あまり安くしてしまうと他の生産者のワインが売れなくなりますからね。それに、教会への貢献になるなら、寄付を理由に購入してくれる貴族もいるでしょう」

「サミュエルお兄様が以前から気になっていたみたいですから、手紙を出しておきますね」

次兄のサミュエルが商家の娘と結婚したので、その人脈も提案しておいた。

ざっと計算するだけでもかなりの収益が見込めそうで、儲かりそうだなあ、と私は

頭の中でニヤニヤしていた。

清貧に背き^{そむ}そうだが、私が独り占めするわけじゃなくて修道院のものになるんだからいいよね。寄付のみに頼って運営するのは心もとないし、いざという時のために自由に使える資金があつたほうがいい。

なぜそう考えたのかというと、財務係へ勉強に行ったアルマが、ギリギリの寄付金のみに運営していることに驚いていたからだ。運営資金となる寄付金は、主にトルトゥリエ伯爵家が出しているわけだが、伯爵家にも余裕がなくなり、寄付金の額が段々と減っている。それに責任を感じて何か打開策がないか考えた結果、売れるものは売ったらどうだろうと思ったのだ。

「ワインは流通させるにしても、小麦はなるべく貯蔵しておきたいと思うのですが、司祭様のお考えはいかがですか……？」

私が小麦について話し始めると、司祭が真剣な表情になった。

例年通り採れた^と麦で麦酒^{ビール}を作るのもいいが、余剰は貯めておきたい。

近年は全国的に不作が続いており、国庫にもあまり余裕がないはず。この先も不作が続いた^とのために、孤児院だけでなく周囲の住人にも分け与えられるようにしたい。

さらに言えば、この春小麦に加えて、できればライ麦も作りたい。

……これは、ライ麦パン食べたい、という私の欲望だけでも。
 「お嬢様のおかげで豊作になりそうですから、貯蔵しましょう。それにシスター・イネスが言っていました、今年には休耕しないで済みそうだとか？」

「はい。『大地への祝福』を捧げていけば土地が弱ることはないのよ」

「お嬢様に負担があるのでは？」

「慣れてきたので間違えずに詠唱できるようになりましたし、王都を離れて気持ち落ち着いたのか、それほど疲れないのです。お気遣いありがとうございます」

私が笑って答えたので、司祭も微笑んでくれた。もちもちパンのために、一心不乱に頑張つて良かった。

その後、司祭の視察を手伝っているとあつという間に昼食の時間になり、私たちは食堂へ向かった。

「旅人さんに振る舞う分のワインは薄めてもいいよね」

ゴミ捨ての当番だった私は昼食を終えたあと、そんな不届きなことを考えながら、厨房の裏にある生ゴミ置き場へ向かった。

煉瓦の壁で囲われた中心に生ゴミが積まれたそこは、お世辞にもいい臭いとは言え

ない。

もちろんあまり好きな場所でもないから早く戻ろうとしていた矢先、普段はしないような異臭がして、私は元を探ろうと壁際に視線をやった。

よく見ると生ゴミの山の前に黒ずんだ毛の塊がある。

「死んじゃった犬か猫を、誰かここに置いたのかな」

そのままにしておけず、私がおそるおそる近づくと、どうやらその毛玉は中型犬だったようだ。その体はあちこち傷だらけでボロボロで、目も当てられない光景だったから、そのまま無視はできなかった。

「喧嘩で負けちゃったのかな……可哀そうに」

埋葬しようと、羽織っていたショールで包んで持ち上げると、ボロボロの身体はぐんにやりと曲がった。

……死んじゃったばかりだと、体は硬くなるものだと言ったことがある。朝に生ゴミ置き場を見た時には毛玉はなかったはずだから、少なくともそんなに時間は経っていないはず……

何だか違和感を覚えて、私は自分の膝の上に犬を乗せて、直接体に触れてみた。

……まだほんのり温かくて、弱々しいけれど、鼓動を感じる。

「……生きてる！」

思わず大声を出す、犬の耳がびくっと動いた。

汚れた毛玉を持って帰ったら怒られるかもしれないけれど、放っておけなかった。

——まだ助かるかもしれない！

私は生ゴミを持ってきた入れ物を放り投げ、急いで修道院の中へと戻った。

ちなみに、私が汚れた毛玉を抱えて「司祭様！ バズレール司祭様！」と大声をあげて走り回ったことは、「いつ、いかなる時も静粛に」と、あとから副院長にこっぴどく叱られた。

第二章 モフモフ、番犬になる

司祭の治療——『治癒』のおかげで一命を取り留めたその犬に、私は守護聖人イサクから名を取って、イザックと名付けた。

外傷は治ったのに、イザックの意識が戻らないので司祭に尋ねると、『治癒』で外傷を治すことはできても、弱って止まりかけていた心臓は、安静にして自然に回復するのを待つしかないとのことだった。

その夜は、急変しないか心配だったので、特別にイザックを部屋に入れる許可をもらって私のベッドに寝かせた。

私は毛布の上からイザックの背中を撫でて、さつき見た司祭の『治癒』の様子を思い出していた。

司祭はいつもの穏やかな表情とは異なり、怖いくらいに真剣な顔つきで、額に汗を浮かべながら、ボロボロのイザックに長い間『治癒』の祈りを捧げていた。

『治癒』には相当な魔力を使うし、誰でも簡単に使えるわけじゃない。